



巻頭言

## 世界が注目する国際会議

●  
吉田善一 Zen-ichi YOSHIDA  
京都大学 名誉教授



1976年（昭和51年）の暮れが近づいたある日、近畿化学協会（近化協）会長、村橋俊介先生が来室され、休眠状態の合成部会を活性化するため、部会長を引き受けてほしい旨申し渡された。当時は先輩教授もおられたので固辞したが受け入れられず、止むなく承諾した。筆者51歳のときである。引き受けた以上は歴史に残る画期的なことをやらねばならない。熟慮の末、この目的を達成するには世界の化学を先導しうる国際会議がよいのではないかと考えた。そこで、合成部会幹事を中心とした実行委員会を設け、協議の結果、(1) 討議主題を有機化学の New Aspects とする、(2) 開催地を京都に固定する、(3) 3年ごとに開催することとした。その上で、IKCOC-1 (First International Kyoto Conference on New Aspects of Organic Chemistry の略) の開催（1979年）準備に取りかかった。

国際会議を成功させるためには、(1) PL（基調講演）、IL（招待講演）として誰を選ぶか、(2) 開催に必要な資金の確保及び(3) ホスピタリティが必要不可欠である。このうち(1)と(3)は実行委員の力で可能と思われたが、国際会議を成功させるために必要な資金集めについては目途がつかなかった。困り果てていたところ、ある企業の責任者が来室され、「800万円を先生に差し上げたい。国際的に役立つことに使用していただきたい」とのこと、まさに「地獄で仏」の奇跡である。企業からの寄付金の目途もついたので、1979年（昭和54年）12月4日から7日にかけて京都市の中心、京都ホテルで開催することにした。大規模な国際会議の開催は実行委員にとっても、ホテルにとっても初めてのことで、国際会議終了まで苦労の連続であった。しかし、初めての試みにもかかわらず、内外の著名人がPLやILを引き受けてくれ、極めて質の高い、かつ実りの多い国際会議の開催に成功した。第1回に続き、第2回、第3回と試行錯誤の末、IKCOC-4からSession 1: Efficiency in Organic Synthesis, Session 2: Organic Synthesis for Materials Science, Session 3: Organic Synthesis for Life Scienceの3セッションから構成された国際会議として現在にいたっている。参加者数も知名度の増大に伴い増加し、IKCOC Prizeを設けたIKCOC-11以降は千名を越す盛況さとなった。

Marburg 大学 R.W. Hoffmann 教授の下記手紙のように、IKCOCに参加された多数の外国人からIKCOCは世界の Best Conference との評価を受けている。

「貴下の先見の明を示す顕著な例はIKCOCです。この国際会議は有機化学の活発な分野と推移する目標に非常によく焦点を合わせております。極めて印象深い学術プログラムに加え、私のような外国人出席者を友人のように感じる雰囲気を作り出していただいた貴下の温かいホスピタリティに楽しい思いをしました」

明年開催されるIKCOC-13も世界が注目する国際会議になることを期待している。

© 2014 The Chemical Society of Japan